

昔むかし、あるところに、お百姓と息子が暮らしていました。息子の名前は、ワーニカといいました。

夏になると、お百姓は、畑をたがやして、かぶの種をまきました。かぶはみごとに育つて、びっくりするほど大きくなりました。お百姓は、大よろこびで、毎朝、畑いっぱいのかぶをながめました。

ところが、ある日、お百姓は、かぶが少しずつ盗まれているのに気がつきました。そこで、ワーニカに、畑を見張るようにいつけました。

「さあ、行って、かぶをよく見張っているんだぞ」

ワーニカが畑に来てみると、ひとりの男の子が、かぶをぬいていました。男の子は、かぶをふたつのふくろにつめると、「どっこいしょ」と肩にかつぎました。けれども、かぶがあんまり重いので、足元がふらふらして、すぐにどさりとふくろを下ろしてしまいました。男の子は、ワーニカを見ると、

「ねえ、たのむから、ふくろをうちに運ぶのを手伝ってよ。おじいさんからお礼をもらえるよ」といいました。

ワーニカは、あつげにとられて立っていました。

「ああ、いいよ」と答えました。そして、かぶのふくろを肩にかついで、男の子の後からついて行きました。男の子は、ワーニカの前を跳びはねながら、いいました。

「おじいさんは、毎日ぼくにかぶを取りによこすんだ。あんたがかぶを運んで行ったら、金や銀をうんとくれるっていうだろう。でも、そんなものは断つて、ひとりでに鳴るグースリがほしいっていうんだよ」

まもなく、一軒の小屋に着きました。部屋のすみに、ひたいのつのを生やした白髪しらがのおじいさんがすわっていました。ワーニカがあいさつをすると、おじいさんは、かぶのふくろを運んでくれたお礼にといって、ちいसान金のかたまりを差し出しました。ワーニカが手を出そうとすると、男の子が小さな声で、

「もらっちゃだめだよ」とささやきました。ワーニカはおじいさんに、

「それはいらぬよ。それより、ひとりでに鳴るグースリをおくれ」といいました。すると、おじいさんは、目が小指の長さほど飛び出し、口は耳元まで開き、ひたいのつ

がびくびくと動きました。男の子が、

「おやりなさいよ、おじいさん」といいました。おじいさんは、ワーニカにいました。

「しかたがない。グースリはくれてやるが、そのかわり、おまえの家の中で一番大切なものをもらうからな」

ワーニカは、

(うちのぼろ家に、大切なものなどあるものか)とあって、

「いいよ」と答えました。そして、グースリをもらって、帰って行きました。

家に着いてみると、敷居しきいの所におとうさんがすわっていましたが、もう息をしていますが、家で一番大切なものというのは、おとうさんのことだったので。ワーニカは、泣きに泣きました。そして、お葬式そうしきをすませると、幸せをさがしに旅に出ました。やがて、大きな町に着きました。ワーニカは、ぶた飼いの仕事にありついて、毎日、ぶたをお城の前の野原に連れて行きました。ワーニカがグースリを手に取ると、グースリはひとりですてきな音楽を奏かなではじめ、ぶたの群れがのこらず踊りだしました。

ある日のこと、お姫さまが、お城の窓辺まじべに腰をかけて外を見ていると、ぶた飼いが、野原の切株きりかぶにすわって、ひとりでに鳴るグースリを鳴らしていました。その前で、ぶたたちが楽しみに踊っていました。お姫さまは、あの子ぶたをいっぴきでいいからほしいと思いました。そこで、召し使いを使わしました。ワーニカは、召し使いに、

「子ぶたをほしいなら、ご自分でいらっしゃいと伝えてください」といいました。

お姫さまは、自分で来て、いいました。

「わたしに子ぶたをいっぴき売っておくれ」

「わたしのぶたは、売り物じゃありません。ちょっとわけがあるんです」

「どんなわけなの」

「じゃあ、お姫さま、どうしても子ぶたをほしいなら、あなたの足を、ひざの所まで見せてください」

お姫さまは、よくよく考えたすえ、あたりにだれもないのを見すまして、スカートのすそをひざの所まで上げました。

「さ、子ぶたをちょうだい」

ワーニカが子ぶたをいっぴき渡したので、お姫さまは、喜んで子ぶたを抱いて帰りました。そして、お城の楽隊の音楽に合わせて、子ぶたを踊らせようと思いました。けれども、

子ぶたは、部屋の中を、あちらのすみ、こちらのすみと、走り回るばかりで、ちっとも踊りませんでした。

まもなく、王さまが、お姫さまを結婚させようと思いました。そこで、国じゅうの若者をよび集めました。よその国からも、王さまや王子さまや、商人や、百姓がやって来ました。王さまはいいました。

「姫のかくされた目じるしを言い当てた者があれば、姫と結婚させよう」

ところが、だれひとりとして、お姫さまのかくされた目じるしを言い当てることができません。どれほど頭をしばってあれこれ調べても、さぐり出した者はいませんでした。

とうとう最後に、ワーニカが呼び出されました。ワーニカはいいました。

「お姫さまの右足に小さなほくろがあります。それが目じるしです」

「よく言い当てた」と、王さまはいいました。そして、すぐにワーニカとお姫さまを結婚させました。

ふたりは、一生幸せに暮らしましたとさ。

おしまい

村上郁 再話

資料『ロシアの民話下』中村喜和編訳／岩波書店